

## 「米国伝道会宣教師文書」に関する様々な報告(三)

——ホルブルック書簡に見る「神戸女学院」初年度の状況——

若 山 晴 子

前稿に述べた如く、一八九四年春に「神戸女学院 Kobe College」と改称したミッションスクールのその後の様子をホルブルック女史<sup>①</sup>から伝道会本部宛てに送られた報告書簡の中にもとめる。

女史は、学校が改称を公けにした一八九四年春の献堂式<sup>②</sup>のあと、病気のため帰米するストーン女史<sup>③</sup>につき添って学院をあとにするが、秋の新年度開講の直前に帰院、早速にポストン宛ての報告を再開した。九月十七日附第四一四号である。この時から一年余りのちの第四二二号一八九五年一月五日附まで八通の報告書簡を書き送った女史の陳述は、前稿に見たソール女史<sup>④</sup>の無音を補って余りある情報を提供してくれている。このうち第四一五号は同志社問題<sup>⑤</sup>への言及を主題とするもので省くとして(前稿で七通と言ったのはこのためである)、また、日本の政治事情に関する若干のコメントも今回は割愛するが、アメリカ逗留中のブラウン女史<sup>⑥</sup>はともかく学院内の当事者たるソール女史の言及しない重大事件、『神戸女学院百年史 総説』言うところの「ある日本化運動」<sup>⑦</sup>の顛末を初めとして、学院内の教員たちの消息、宣教師教員増員要望の事情——殊に予てより念願の音楽専任教員選任に関する所見は注目に価する——等々につ

き、ソール女史の恬淡とはまた一味違った沈着な口調で語って、説得力がある。但しこのたびは、これらの書簡、本誌前二稿と同じ「訳および註」の形式によることなく、問題別にまとめて見てゆくことにしたい。前二稿と同趣の訳出註記は後日、女史の全書簡を総覧できる折りを待っての敢行とならせたい。

「ある日本化運動」の顛末　学校の運営上これまでに多少の悶着はあったにしても、内外の耳目を聳たしめ好事家たちの関心をひくような騒動を経験したことのないこの学院にとつて、この秋の出来事は特筆に価することと言えよう。日本人教員が二人、学校の在り方につき、あからさまにその方針の改訂を迫った—というのである。

これは、本誌第一四号<sup>⑨</sup>にとり上げたソール女史の手紙が援引となり得る、国粹主義的傾向が教会関係者の中にも充滿しつつあったことと深く結びついた事件と見る事が出来る。ホルブルック女史は一八九四年十一月十三日附での出来事の発端を報じ、同月二十六日附でその落着を告げる。従つてこれはおよそ二週間ばかりの内輪のもめごとにすぎなかったわけであるが、その根底には複雑なものがある。

「過去五、六年というものの、この学校の外国人教師たちは、様々な折りに、この学院<sup>⑩</sup>を日本人の手に引き渡すよう求められて来ました」と女史は、初めの便に書きおこす。「そして今、彼らは、私どもが名目上の院長、財務係、それに学校の創立者(この Founder なる語には下線が附されている—筆者註)を日本人の中から出すようにと求めて来ます。それで学校は政府から認められ—と彼らは申します—、学校に教師に卒業生に利するところ大である、と。

私どもは、外国〔人〕の学校で教えるのが難儀なことを認めます。また卒業生が不利であることを認めます。…けれども私どもには私どもの方針をそのように変える時が来たと考えることはできません。」

すでに我々は一八九三年十一月に書かれた二通のソール書簡に同様の文言を見た。<sup>⑪</sup>とりわけ十一月八日附の書簡の

一節、「この学校で教えておりますわたくし共は、〔今は〕決して、この学校を日本人の手に渡す時ではない——と感じております。女子教育は現在、在るべき状態にございません〔から〕」という件りは、予てよりの、この学校が目ざしている「より高度の訓育の大切さを認めて下さる方はまだほんの少数<sup>⑬</sup>」という当時の世相に対する疑念を踏まえて説得力がある。事実、この書簡(更に遡って一八九三年八月九日附である。)を紹介した際の註記において言及したように、この時期の日本の国勢は、キリスト教系と否とを問わず、女子教育に対して酷薄であった。とあれば、これを守るにはこのような時局から脱却した理念の荷い手の盡力が不可欠で、これが神戸女学院の宣教師教員たちをして、むしろ頑<sup>かたくな</sup>とも見える方針を貫かせしめた一因であった。

しかしまた、時局から脱却した理念というのがいわゆる「洋教」であり、その荷い手が外国人である時、事態は一面面倒なものとなる。

まず、学校の資金繰りのためには日本人をスタッフにした方が有利であるという意見。

「仮に私どもが学校の経営を保持することに固執いたしますならば、私どもは、学校に多額の寄附をして下さい——と心安く日本人に頼むことはできません」と、これは更にまた遡って一八八九年五月十二日、学校をカレッジにするための目論見に着手した頃の校長ブラウン女史の告白である。<sup>⑭</sup>しかしながらこの告白には以下の如き弁明の加えられたことを思い出さなければならぬ。「この学校を日本人の管理に委ねない限り、この件で日本人の協力を確保できると思いません。〔しかし〕その場合私どもは、現在享受しております『高度なキリスト教教育の最高の理想を実現するためのより大いなる自由』と『摩擦のない状態』とを放棄する決心をしなければなりません。」

キリスト教教育なくしてこの学校は在り得ない——と、これが創立当初より連綿として守り継がれた(そして今日なお遵奉され続けている)この学校の根本命題である以上、それを護る便宜をないがしろにする危険を極力避けねばならぬ

こと、言うまでもない。

そして、ホルブルック女史のこの時になると、すでに、理事会に宣教師はただ一人という状態でキリスト教教育科目を放擲され廃校を余儀なくされた東華學校の事例が、厳として目の前にあった<sup>⑦</sup>。もともと今般ホルブルック女史はこのことに直截拘泥したわけではなかったが、この事件はなお、「政府の認可を受ける」ということの利害についても深く考えさせる土壌を成したものと考えられる。

再びホルブルック女史の報告に聞こう。

「私どもの學校が政府に登録され認可されると、私どもは常時彼らの監督下に置かれ、こちらで禁止されあちらで制限されることになるでしょう。彼らはすでに、私どもが〔學校〕名を変え、その石柱に“Kode College”にあたる漢字を刻むようにと求めています。私どもの教育課程は彼らの改訂の対象となるでしょうし、困難はとどまるところを知らないでしょう。岡山の學校の例があります、カリキュラムを少々変更したかったのに、地方政体から聖書を持つことに異議を唱えられてこれに屈することを余儀なくされたのです。同志社も少なからず経験したことでしょう、たとえその干渉が甚だしいものでなかったとしても。

私どもの良き友人で地所問題においていつも私どもの側にお立ち下さった本間氏<sup>⑧</sup>、また在職一八年になろうという筆頭教員の山内氏<sup>⑨</sup>はこの案を是認なさいません。本間氏は殊に、そうしないようにと強くお勧めなさいます。」

このたび学院内にこの問題を提起したのは二人の若い女子教員であった。ホルブルック女史はその実名をあげることはしない。もつとも、そのうちの一人が展開した論法を説明するために彼女の來歴を披露しているところから、これが宮川 敏女史であることがわかる。しかしながら、この時ホルブルック女史の憂慮するところは、この問題が学院全体の騒動となるかもしれないという杞憂では毛頭なくて、この二人の有能な教員が事志とたがうことによつて辞

職するや否やということとその場合はその空席をどのように埋めるべきかということであった。それでなくとも教員不足をかこつ状況だったからである。しかし女史の信念は固かった。

「ずっと以前に海老名氏<sup>②</sup>はこの学校を宣教師たちの手から取り上げるつもりだとおっしゃいました。〔中略〕しかし今は本当にこの学校を日本人の手に引き渡す時ではありません。〔中略〕この問題については、そのようなことに譲歩するくらいなら全学生を失う方が良くように私には思えます。」

この報告が書かれて一三日後の十一月二十六日附でホルブルック書簡が告げる事件の終わりは、何ともあつけないものに見える。

「私は前便で、院長と他の役員たちを日本人に——という申し入れのことを書きました」とホルブルック女史は述べる。「出来る限り多数の伝道団仲間と協議ののち、ソール女史は、指導者であつた二人の教師を呼び、大変真率な話をなさいました。その大意は、——もしあなた方がこのような学校で教えるのがおいやなら、どこか別の勤め口をお探しになつて結構です。また、もし学生たちがわたくし共がこれまで与えてきた教育を受けたくないとなれば、わたくし共は学校を閉めてもよろしい。けれどもあなた方の要望に譲ることは全く出来ません——と。この話は〔事情を〕好転させました。そして何もかもが落ち着いた心からなるものの観を呈しております。」

方針を変更することもなく、有為の教員に去られることもなく、学院は平常に復したという。しかし事の本質がそれほど単純なものでないことは自明であつた。これは一女学校の内部に限られた問題ではなくて、伝道団<sup>ミッシン</sup>と地元の教会の在り方に関わる、時の趨勢が生んだ現象の一つであつたという点で、「伝道活動を続けてゆくためには、私どもの伝道団としての関わり方に全面的な調整が必要でしょう」とは、ホルブルック女史の喝破するところである。<sup>②</sup>「海老名氏や他の極論家方ではなく、日本のキリスト教信徒集団との率直かつ容認し得る調整が……。」——とは言え、さ

しあたって何が可能なのであろうか。「私は、先生御自身とクラーク博士<sup>②</sup>(の御意見)に、つまりこの学院は出来る限り長く現行の管理運営の下に保たれるべきであるということに、心底同意しております。しかしながら、どれほど長く持ちこたえられますものか、また、学生たちを保持できますものか、これは深刻な問題で、日毎にその深刻さを増しつつあります。」

折りも折り、追い討ちをかけるような話が聞こえてきた。一八九五年二月二十八日附のホルブルック書簡書き出しの一節を見よう。「私ども、ボストン經由で、小崎氏<sup>③</sup>がブラッチフォード氏<sup>④</sup>にもうこれ以上宣教師は要らないとお書きになったと伺いしましたが、驚きはいたしません。けれども、氏の言が、この学校に音楽教師を送るかどうかを疑わしくするに力ありとは、びつくりいたしました。」最近の同志社の動きからすれば、さもありなむ。しかし神戸女学院の現状はこれとは全く異っている。宣教師教員の派遣はこの学校にとっては悲願と言ってもよかった。その言い分を、次に拾ってみよう。

### 神戸女学院教員事情

この学校の教師団の顔ぶれは、校名を「神戸女学院」と改めた頃にかなり豊かになったことは、すでに本誌前号のソール女史による学校報告に見たとおりである。<sup>①</sup>しかし教師団の核とも言うべき宣教師教員は手薄であった。ホルブルック女史の帰院後の第一信(一八九四年九月十三日附)には、五人のメンバーのうち三人が病中不在となったと記されている。五人とは、ブラウン女史、ソール女史、ホルブルック女史、ケント女史、ストーン女史で、このうち三人―すでに婦米療養中のブラウン女史、病気のため引退帰米したストーン女史、現場で療養中のケント女史―を欠いた宣教師陣の疲労困憊の様が伝えられる。夏以来気管支炎とぜんそくのために寝ついているケント女史に代わって大阪伝道区<sup>⑤</sup>からオルチン師<sup>⑥</sup>とタレー女史<sup>⑦</sup>が週四時間音楽の指導のために来院し、ストーン女史の授業

は 그리스월드女史<sup>㉑</sup>の奉仕に与っているが、いずれも專屬宣教師たちが教室外で果たしてきた役割までカヴァーし得るものではない。ケント女史は復歸し得るのだろうか。しかしこれについては項を改めて述べよう。そして 그리스월드女史は、一般伝道の最適任者で、本来の協作者たるギューリック女史<sup>㉒</sup>の加齢と健康を考えると、 그리스월드女史を学校に引きとめておくことは望ましいことではない。それは「女史に対して、もしくは女史と共に在るべきギューリック女史に対して、あるいは活動に対して、公正ではございません」と、ソール女史も記している如くである。それ故、「私<sup>た</sup>どもは他の教員を入れなければなりません。さもないとソール女史が倒れるでしょう」と婦任早々のホルブルック女史<sup>㉓</sup>。「私<sup>た</sup>どもは、古典か文学専攻のカレッジ卒業者を求めています。もしそのような人にお会いの節はわたくし共の学校を思い出していただけませんか。」

学院内ではブラウン女史の婦任を心待ちにしながら、一進一退を繰り返して離米の日の定まらないブラウン女史の活躍にかける期待の減退、またこれに伴って人選に関する要望のますます切になる風が、日を追って増してゆくとしてもいたしかたあるまい。一八九五年に入るとホルブルック書簡には三人のアメリカ婦人の名があらわれる。まず、かつて同志社に在って今は婦米中のマイヤー女史<sup>㉔</sup>。女史を神戸女学院に―という案はすでに前年一八九四年の日本伝道団の総会に出していたことではあるが、これは関係者たちにとつては(ブラウン女史は別として)<sup>㉕</sup>大いに途惑うところであつたらしい。本誌前号のブラウン書簡第二六〇号に引かれたマイヤー女史自身の手紙には逡巡の色が見え、結局翌一八九五年三月には自ら神戸宛てに赴任を断念する旨書き送ったというが、これより早く一月十四日附でホルブルック女史は、自分たちは皆女史を好いており、心から歓迎するであろうと述べる一方、「私の最も気になりますところは、京都の日本人方がマイヤー女史の京都婦任を期待しておいでのこと。そしてこの方々は、私どもの伝道団はあちらの学校の犠牲の上に当地の事業を築き上げている―とお考えにならうかと、心配しております」と書き送った。

그리스ワルド女史の退去とマイヤー女史の来任の合理性もわかってもらえないのではないかと——ということもある。その上「外部の」人びとから、マイヤー女史は教師団の一員として来任するのであって院長になるわけではないからの点を諒解してもらうように——というような「警告」を受けたこともあったらしい。

とまれ、この件はマイヤー女史の決断によって沙汰止みとなった。四月十七日附のホルブルック書簡は、その知らせが神戸に向かって発った折りのブラウン女史の歎声に呼応する。「今朝の便は、マイヤー女史の、私どもの招きを受けないのが最善との決心にいたしましたとの便りをもたりました。また私どもはブラウン女史から、女史がこの秋の帰任を断念なさったということを伺い、同じく心を痛めております。」

もつともこの前の便は、ソール女史のもとに、手ごたえのありそうな——と言うよりも大いに望ましく見える自薦状をもたらししていた。書き手は、マサチューセッツ州チェスターフィールドのキャスリーン エドワーズ女史<sup>⑧</sup>。これも四月十七日附のホルブルック書簡に聞けば、「この方はソール女史といささかの知遇があり、なおまた、ストーン女史からお友だちへの便りに、どなたか自分にかわって下さる方は(ないものか)とあつたと聞いたことが引き金となつて、直接ソール女史宛てに書く気になりました。ソール女史へのこの手紙にこの方はご自分の資格証明書の写しを同封しておいでで、これらは大変申し分ないものです。エドワーズ女史はマウントホリヨークの八七年度生で 그리스ワルド女史の同級生です。 그리스ワルド女史はこの方を激賞していらつしやいます。」「私どもはエドワーズ女史の来任の妨げになるものが皆無であるよう願っております。女史がいらしてもなお、私どもは手不足でございましょう。」

前稿に紹介したソール女史の唯一の手紙がホルブルック女史のこの便りと正に一致する。ソール女史は大変乗り気で、いつもながらモーゼス スミス夫人<sup>⑨</sup>の力を借りる決心をした。滞米中のブラウン女史にも当然この話は伝えられ、この年の五月、六月、女史は大いに気をもんでいる<sup>⑩</sup>。



しかしこの話も不成立に終わる。ソール女史、ホルブルック女史の手紙は五月七日にボストンに着いた。またブラウン女史の五月二十三日附の手紙が同月二十七日にボストンに着き、この三通に対してボストンからは五月三十一日附の返信がブラウン女史宛てに出されたことになっている。<sup>④</sup>この段階で本部はこの話に好意的であった。しかしブラウン書簡第二七〇号の文面は、筆者の読解の範囲を超えてよくわからない。結局、この話をしないものにする最終決定を下したのはブラウン女史なのであろうか。

そして、この書簡の一節、「もし新任宣教師が二、三年しか留まれないということが初めから確かな場合には、私はその方を送り出すためにかかる大出費には反対票を投じることでしょう」という件りを見て、これに遅れること三か月余の十月五日附ホルブルック書簡の一節を思い出した。真に望ましい恒久的教師が得られない状況であるならば「小さな助けであっても深謝して受けましょう。たった二、三年のために一人を送り出すことが高くつくとは知っております。けれどもそれは、ソール女史が倒れることを思えば、高くはありません。」——現場は、それほど切迫していたのである。

ホルブルック書簡に登場する三番目の婦人はアボット女史。<sup>⑤</sup>先の文章は、この人と神戸派遣のために契約したけれども在任は二、三年間のことになることと知らされた時のものである。アボット女史のホルブルック書簡初出は、この十月五日附で、前便にて女史の指名を知ったとあるが、実はこの人のことも、ブラウン女史はソール女史との交信でいち早く知っていたものか、エドワーズ女史を断念する気になった時点の六月二十九日附ですでにこの名に言及していた。そして八月十九日附では、アボット女史が使命に適う人であって早急に派遣され得るようにと切に願っていたのである。まずは希望の灯がともったかに見える。ホルブルック女史の口調には力がこもっている。「現在、上述の学問（心理学、神学、歴史、英文学等々——筆者註）とその他にこれに類するものを教えることが出来、また、恒久的にか、もしく

は五、六年来ることの出来る人を先生が御存知なければ、アボット女史を直ちに御指名下さり、一月までに着任ということにしてはいただけませんでしょうか。たとえ女史が二、三年しかおいでになれませんが、女史が御自身の学校の代理をお求めになるには遅すぎるかもしれません、そうでないことを願っております。何はともあれ、どなたにもせよ、心理学と倫理学をカレッジの学生に教え得る方を、どうぞお送り下さい。」

しかし又しても、事は陽の目を見なかつた。ソール女史、ブラウン女史、ホルブルック女史はいずれもこのあと一八九六年の春までボストン宛てにペンを取らず、この話は立ち消え。その事情は不明。新任人事は婦人宣教師に関する限り膠着状態に陥っている。

一方、一般教員の方は――と言うと、一八九五年の夏に一人の教員の辞職を見た。「昨年私どもは殆どアメリカ人のように英語を話す日本人教員を擁しておりましたが、この女が六月に辞任いたしました。そして週二〇時間が私ども外国人教員に割り振られました。これだけのものを委せるに全く足るだけの英語の知識を持つ日本人は見当たらず、前年十一月の事件の折りにも、この人の授業に対する貢献度の故にホルブルック女史をしてその進退を憂慮せしめたことは記憶に新しい。因みに、期を同じくして同窓生教員渡辺 常女史<sup>④</sup>の転出もあつた。『名古屋清流女学校よりの切なる招聘により』<sup>④</sup>とのことであるが、これも前年秋の事件と関わりありと言えようか。しかしこのことについてホルブルック書簡に殊更の言及はない。

特記すべきもう一つの事は山脇(のちの井深)はな夫人の帰国である。神戸英和女学校を第六回生として卒業後鳥取英和女学校の教師となつたこの人は「そこでホルブルック女史に出会い、その勧めで同女史の母校マウント・ホリヨークへ留学<sup>④</sup>」したという、女史とは旧知の間柄で、留学先で理学士の称号を得て帰国の際母校に戻ることになつた。

一八九五年一月十四日附でホルブルック女史は、「私どもには、六月にホリヨークで理学士の学位をお取りの山脇夫人が加わるはずですから、私の学科はかなり楽になるでしょう」、また十月五日附で「私どもは来週の山脇夫人の帰国を楽しみにしております。このことは理化部門を楽にしますから、私は現在やつておりますよりも少し余分に英語の授業が出来ましょう、私の専門は勿論理化部門ですが」と期待を露あらわにしており、この期待は裏切られなかった。しかもまた時を同じくして、もう一人の同窓生がアメリカ留学を了おえて母校に來任する。第四回卒業生の塚本ふじ女史である。同窓会誌『めぐみ』第十二号(明治二十八年十月二十七日発行)に関連記事があり、こうして神戸女学院は教師陣の手薄をかちながらも何とか状況を乗り切つて行つたことがわかる。グリスワルド女史に替わるにはステュワート女史の名があがつて来る。もつともこれらは次年度のことになるから、本誌次号の話題とすべく、残しておくことにしよう。

**音楽担当専任教員に関する所見** 神戸女学院の宣教師教員人事については、もう一つ重大な懸案事項があつた。音楽教育を専門とする善き宣教師を求めていたのである。

この学校が伝道の手立てとして英語と歌を教えたところから始まつた——と言うことは単純にすぎるかもしれないが、この二つが創立の当初から大切な教科として扱われて来たことに間違いはない。教師がアメリカ人であつたから、英語を教えることに不思議はない。その教師はまたキリスト教の宣教師であつたから、神を讃美する歌を教え、歌と奏楽によつて礼拝に奉仕することを教えた。それが教科の中に組みこまれ、善にして美なる「音楽」の教育課程として練り上げられてゆこうとしている。しかし、適切な良き指導の出来る教師をどのように求めようか。努力は重ねられたがめぐり合わせは良くなかつた。<sup>⑤</sup>一八九〇年をすぎてようやく、使命に見合った人材を得、楽器と教場をまがりな

りにも整えはした<sup>⑤</sup>とは言え、一八九四年の時点で音楽の授業専一の独立の建物を持ったということは、女の学校が理化学のための専用校舎を持ったことと共に、瞳目に価するものではないか。しかも両学舎共にその建築の采配をふるったのがホルブルック女史であつたことは、また関心をそそる事柄ではある。が、まさにその時、学院内の敬愛の的であつたこの宣教師教員が病に倒れ、年齢的にも継続の予測の立ち難い状況に陥つてしまった。

この音楽専任教員はアビー ケント女史。すでにブラウン書簡、ソール書簡にたびたび紹介されており、我々は女史が来日当初すでに若くはなかつたことや音楽を教えるのにとりたてて支障はないが耳が遠いことを知っている。しかしそれ以上に、女史が教師として、単に学科の専門家と言うにとどまらず、人格的な指導者として、どれほど生徒たちに盡くし、またそれ故に生徒たちに慕われ、同僚宣教師たちの力になつて来たかの証言にも事欠かなかつた。

夏前に体調を崩した女史は現場を離れて療養に努めたが、結果ははかばかしくなく、ホルブルック女史が帰任して新学期の始まつた時の報告に、「この学校の音楽教師ケント女史は夏中病氣でした。気管支炎とぜんそくです。女史はなお数週間は仕事につくことは出来ないでしょうし、出来たとしてもごくごく僅かにすぎないでしょう。今は、ベッドに坐る程度です」とある。十一月には「治療のためなお大阪に在り、その回復は全く緩慢<sup>⑥</sup>」で、翌年二月には学校に戻つたものの、「出来ることはほんの少し。その為すべきところにはおおよそ及びません。女史は神経的フラストレーションに頻しており、眠れず、弱々しく、挫折感をお持ちです。女史は後任が来られるまで歯をくいしばつて持ちこたえていらつしやるのです」<sup>⑦</sup>——と。そしてここにホルブルック女史は更に続けて、「私どもは現在音楽教師を二人ほしいとは申しません。どなたかお一人、この部門の責任を引き受けてケント女史を解放して下さる方を〔求めております〕。ケント女史は私どもの宝ですから、私どもは断腸の思いでこれを書いております。学校において女史の感化力は偉大で、常に時宜を得ていますから。女史は本当に私どもの他の誰よりも、大きな力と精神的感化を少女た

ちに及ぼしていらつしやいます。」とつけ加えた。事態は同僚宣教師たちの愛惜の情を超え、とりあえずこの一年は大阪伝道区のオルチン師とタレー女史の救援に与つて授業の方は申し分なくこなせたとは言え、その先をどのように対処すべきかの良案はなく、ますます切迫の度を深めて来ていることがわかる。

この間、一八九四年の暮近くにウイニフレッド アッキンソン<sup>56</sup> という名があがつてきた。しかし、この人が宣教師教員としての適性を備えているかどうかに疑念が生じた。ブラウン女史もホルブルック女史もこの案に賛同しなかった。事はなお懸案事項のままであつた。そして一八九五年四月十七日附のホルブルック女史の手紙。

「私どもは、先生が私どものために音楽教師をお見つけ下さいますのを待ちこがれております。セント女史はかなり良くなるように見えます。タレー女史が今学期も以前と同様お助け下さり、大変喜んでおります。」

神戸女学院の音楽教育に対するタレー女史の絶大なる献身の芽吹きが始まっている。結局、神戸女学院はタレー女史によつて音楽の独立した専攻課程を実現することになるのである。そしてこのこともまた、神戸女学院史上の大切なトピックスになるはずであるが、これは他稿に譲るとして、本稿は、ホルブルック書簡に見える一八九四／五年当時の音楽科の状況を紹介してしめくりとしたい。一八九五年二月二十八日附の報告である。かなりの長文になるが、含蓄の深いところが多々あるから、一節はば全文を掲げることしよう。

「音楽部門は大変良い状態にあります。外国人数員の経費以外の全てを賄っております。声楽のクラスに加えて器楽の生徒もあつて六二名。七人の補助教員がおりますがこの人たちが自身はまだ学生なもので、きめ細かな監督指導を要します。タレー女史が週に二日大阪からおいでになつて私どもの窮境を助けて下さいます。当然のことに、女史に私どもの常任教員になつていただくことは出来ないものかという疑問が沸いてまいります。この考えを、私に出来るかぎりの細心さをもつて陳述させていただきますよう。タレー女史は優れた音楽教師で、良き音楽専門家でいらつしや

います。けれども女史の理想とする基準がとても高いものですから、学生たちはついてゆけなくなり、この勉強をやめたいという気が広がっております。女史にその基準をもう少し低めることを得心していただくべきでしょうか。しかし私が思いますには、それがより良い途であると言つて女史を説き伏せることなど、殆ど不可能でしょう。この国の人々は音楽に理解を持ちません。またこれに知的に精進するなどというのを好みません。彼らの理解は他の西欧芸術よりも三百年は遅れているとケント女史はおっしゃいます。こういうわけで、この人たちは徹底的な反復練習に耐えられず、それを強要し、また、私どもの学校の生徒は少なくとも日に二時間を練習に費すのでなければ教えないというタレー女史に耐えられないのです。私どもの生徒たちは皆、日に一時間がせいぜいで、それから他の課題を続けます。ケント女史は、極度の忍耐と気働きと、生徒たちに対する愛と献身に結びついた判断とによつて、この部門を徐々に現在の繁栄状態にもつていらつしやいました。言いづらいことではございますが、今にして言わなければならぬことがございます。もし、タレー女史がその任におつきになれば、音楽受講生の半数が去るでしょう――と。実際すでに何人かがそうしました。また他の人びとは時間をかけて忍耐強く話をし、タレー女史に代理をおつとめいただくことを納得してもらいました。もし生徒たちが知らずにいれば、この人たちは、最も優れた音楽の基礎を学ぶ絶好の機会を失つてゆくのです。けれども、先に申しましたように、この人たちはそれを評価し得ず、また女史のお人柄は〔それでは〕満足しません。先生は日本人の歌をお聞きになったことがありでないということを忘れておりました。<sup>⑤</sup>私が高度な音楽の基礎と申しますのは何かということですが、私は単に、通常の祈禱会の讃美歌を正確に歌い、また簡単な音楽を演奏する能力のことを言っております。この学校の総体の目的は教会の礼拝を支える助けになるような音楽的訓練をすることです。これは恐ろしく気力を要する仕事で、ケント女史がこれでお倒れになったのも不思議ではないと思えます。女史は現在の状態を續けて、来年か、あるいはもっと早くに、ストーン女史と同じような具

合に帰米ということになりました。私どもは学校をタレー女史の手に委ね、それをつぶすことになりました。かそれとも、アメリカから新任教師に来ていただけるでしょうか。私ども、もう一人のケント女史が決して得られないことはわかっております。女史は、身体的健康を除けば、必要なものは全て備えていらつしやいますから。もし女史が新任教師来任後も暫時留まる事が出来れば、それだけでも計り知れない恵みとなることでしょう。私どもはこの試み多き日々、最も大いなる智慧を必要としておりますから。〔略〕私はケント女史の状況があまり良くないことを知っております。また、女史がそうなさることは、ひとえに女史の大いなる犠牲であろうことを、知っております。〔略〕けれども女史は、その弱さにおいてさえ、女史の顔を見る全ての人―学生たちと、教員たちもそうですが―に力を与えておいでなのです。」

何とも幸いなことに、タレー女史に関するホルブルック女史の憂慮は杞憂に終わった。一八九六年に正式に神戸女学院の教師団に加わったタレー女史は十年を費やして「初めて本格的な音楽専攻課程である音楽部の組織を創り」、「タニクソファ」の発音も印象的な「Tonic Sol Fa 記譜法による手引き書を遺産として残していった。そしてこのことは、先にも述べたように、別の機会に詳述されるべきかと思う。一八九四年の春にこの学校が校名を「神戸女学院」と改めたのち、その年の九月からの新年度―一八九五年秋までの一年間―の状況を、時の院長代行ソール女史の力強い片腕として学院内に目配りしたホルブルック女史の報告書簡の中に拾って見れば、以上の如くである。この年度になお懸案事項となっている数々の問題については、本誌次号以下に順次説明してゆきたい。

なお、本稿に紹介したホルブルック書簡を同じ時期に書かれたブラウン書簡及びソール書簡と、発信年月日によって対比してみれば、以下の如くである。（表中、上部三桁はポストン本部における整理番号、（ ）内は発信年月日を示す。）

ホルブルック書簡

(神戸発)

四一四(一八九四・九・一七)

四一五(一八九四・一〇・九)

四一六(一八九四・一一・一三)

四一七(一八九四・一一・二六)

四一八(一八九五・一・一四)

四一九(一八九五・二・二八)

四二〇(一八九五・四・一七)

四二二(一八九五・一〇・五)

ソール書簡

(神戸発)

一三三(一八九四・一二・一九)

一三四(一八九五・四・一六)

ブラウン書簡

(米国内)

二六五(一八九四・一二・六)

二六六(一八九五・二・四)

二六七(一八九五・三・二二)

二六八(一八九五・五・二三)

二六九(一八九五・六・一五)

二七〇(一八九五・六・二九)

二七一(一八九五・七・二九)

二七二(一八九五・八・一九)

右の書簡のうちブラウン女史の第二六五号とソール女史の第一三二号は本誌第一五号(一九九七年五月発行)に取り上げられたものである。

註

① Miss Mary Anna Holbrook, M.D. (1854-1910). 本誌第一四号「ソール書簡―訳および註⑤」の註⑯に記したところにやや説



明をつけ加えれば、女史はマウント ホリヨーク セミナリーに学び、ミシガン大学で医学を修め、アメリカの婦人医学博士のバイオニアの一人となった人で、二つの学校で培った徳性と知性を発揮して宣教師の使命を全うしたと言えようが、わけても一八九一年暮から一八九六年秋までと一九〇二年初夏から一九一〇年春までの長期にわたって神戸女学院が受けた恩恵は計り知れない。

② 本誌前号「ソール書簡―訳および註(六)」参照。

③ Miss Cora Augusta Stone (1868-1904)、神戸英和女学校ミッシヨナリー教員。一八九四年四月十七日に病氣のため引退帰米。本誌第一四号「ソール書簡―訳および註(五)」の註⑤参照。

④ この時代、学校の新年度は一般に九月に始まった。四月を年度始めとするようになったのは、神戸女学院の場合一八九九年であるが、官公立の場合は東京大学の一九二〇年をもって初めとし、翌一九二一年度より各大学、高等学校がこれにならった。

⑤ Miss Susan Annette Searle (1858-1951)、神戸女学院第四代院長。前稿は女史の米国伝道会本部宛ての報告書簡である。

⑥ 本誌前稿「ソール書簡―訳および註(七)」の註①参照。

⑦ Miss Emily Maria Brown (1858-1925)、神戸女学院第三代校長・院長。女史の伝道会本部宛ての報告書簡は本誌第七号より連載中。

⑧ 『神戸女学院百年史 総説』第三章第三節の小見出しである。

⑨ 本誌第一四号は一八九六年五月発行。取り扱ったソール書簡は一八九三年五月四日附から同年十一月八日附までの計五通。

⑩ 神戸女学院の外国人数員は全員が米国伝道会所属の独身婦人宣教師であった。

⑪ Institution とある。

⑫ 本誌第一四号「ソール書簡―訳および註(五)」三九頁、四二頁(本稿に引用)。

⑬ ソール書簡一八九三年八月九日附、本誌前掲号三一頁。

⑭ 前掲記事の註④参照。

⑮ ブラウン書簡一八八九年五月十二日附、本誌第一〇号七頁。

⑯ 現行の学校法人神戸女学院寄附行為には、「この法人は、キリスト教信仰にもとづく立学の精神により、(略)学校教育を行うことを目的とする」とあり、またその細則には「(前略)学院とその名においてなされるすべての業が、キリスト教(Protestant)に基づく建学の精神にのっとり、三者(神戸女学院と在米の支援団体コーベ カレッジ コーポレーションと神戸女学院同窓会

を指す「筆者記」の共同の業としてますます進展し、神の栄光をあらわすものであることを願う」との文言が見られる。なおまたこの法人は、「この法人の目的たる事業の成功の不能となった場合」には解散することもあり得るが、その場合における残余財産は、「この法人の目的を継承するキリスト教信仰にもとづく他の学校法人に贈与する」とも言明されている。

①⑦ 東華学校の廃校は一八九二年三月のことであった。『同志社百年史 通史篇一』一三七頁—一八七頁参照。

①⑧ 本間重慶牧師(一八五六—一九三三)。一八七九年に按手礼を受け、彦根、天満、神戸、神戸雲内の諸教会を牧す。神戸女学院草創期の土地名義人であった新島 襄師の歿後、一八九三年よりこの学校の敷地管理にあたる「三人委員会」の一人であった。

①⑨ 山内松鶴氏(一八五一—一九二〇)。一八八一年に「漢学教授を委任」(『めぐみ』創刊号三〇頁)されてより二八年間、善きクリスチャン教員として学院のために盡くした。『めぐみ』改号後第一号—大正十年八月二日発刊—六五頁以下に追憶文。

②⑩ 宮川 敏女史は神戸英和女学校第一回卒業生の一人。中国人孤児で、はじめ該地に赴任中であつた米国伝道会宣教師 Rev. John Thomas Guick の養女となり、共に来日。当時の名を Martha Guick という。のちに宮川経輝牧師の養女となり改名。在学中から「アメリカ人並みの英語力」で宣教師教員を輔けていたが、この事件当時の様子をホルブルック女史に聞けば、「神学上は、この人は日本で最もリベラルな教師をもつて任じ、マウントホリヨークは自分にとつて保守的にすぎると言います」とある。

②⑪ 海老名弾正牧師(一八六五—一九三七)。本誌第一四号「ソール書簡—訳および註⑤」所収のソール書簡第一二九号、第一三〇号—一八九三年十一月発信分—に関連記事。海老名氏については同稿の註⑤に少述。

②② ホルブルック書簡第四一八号—一八九五年一月十四日附。

②③ Rev. James Barton, D.D. 米国伝道会ボストン本部の文書担当書記(Corresponding Secretary)である。この任に就いたのは一八九四年。本誌第一五号「ブラウン書簡—訳および註⑥」の註⑥に関連事項。

②④ Rev. Nathaniel George Clark, D.D. 前記バートン博士の前任者。一八六五年から二九年間、海外の現場に在る宣教師との交信を担当した。一八九三年当時、学校の経営や據つて立つ処の保持のために心を砕くソール女史を励まして、「地歩を守る」ことを勧める返信は殊に印象深い。そしてバートン博士もこの考えを踏襲することに変わりはなかった。

②⑤ 小崎弘道師(一八五九—一九三八)。日本組合教会牧師。一八九〇年から七年間同志社社長をつとめた。

②⑥ Mr. Blatchford とある。米国伝道会の在シカゴ会員 E. W. Blatchford, Esq. のことであらう。

②⑦ ソール書簡第三一三—一八九四年四月三日附。本誌前号三九頁以下及びその註③④⑤参照。

②⑧ Miss Abbie Wallace Kent (1845-1932). 神戸英和女学校の音楽教育担当宣教師教員。在任一八九一年—一八九六年。一八九

○年以降のブラウン書簡、ソール書簡に多々言及あり。専門教科のみならず生徒たちの心を把えての教化に優れて、人望があった。  
29 Rev. George Allchin (1835-1935). 声楽の才に恵まれた宣教師一家の当主。明治の日本初期讃美歌集の編集と蒐集で名高いが、同時に美声による歌唱と幻燈機とを活用した伝道活動に実を挙げ、また宣教師住宅、学校、教会等の建物の世話や造園にも腕をふるった。―神戸女学院讃美歌研究会の新撰讃美歌研究(刊行準備中)に小伝。

30 Miss Elizabeth Torrey (1848-1922). 神戸女学院に音楽専修学科たる「音楽科」を創設した婦人宣教師。神戸女学院学院歌の作曲者とも伝えられる。専任教員としての学院在任は一八九六年から一九〇九年であるが、囑託としての来講期間もある。

31 Miss Fanny Ensworth Griswold (1864-1953). 本誌所載「ブラウン書簡―訳および註(十)」の註⑨参照。

32 Miss Julia Gulick (1845-1936). 本誌前稿の註⑫参照。

33 ソール書簡第一三四号―一八九五年四月十六日附、本誌前稿二八頁。

34 ホルブルック書簡第四一四号―一八九四年九月十七日附。

35 Miss Mathilde Hermine Meyer (1852-1927). 本誌第一五号「ブラウン書簡―訳および註(九)」の註⑬参照。

36 ブラウン書簡第二六〇号―一八九四年五月二十五日附参照。―本誌第一五号一一頁。

37 前掲書簡第二六七号―一八九五年三月二十二日附、本誌六頁。

38 Miss Catherine Edwards Chesterfield Mass. とある。前稿ソール書簡には Miss Catherine Edwards, Alta School, Highland Park, Ill と紹介されていた。

39 Mrs. Moses Smith, Emily White (1835-1927). 米国中部婦人伝道会(WBND)会長。本誌第一四号「ソール書簡―訳および註(五)」の註⑭参照。

40 本誌所載のブラウン書簡第二六八号―一八九五年五月二十三日附、第二六九号六月十五日附、第二七〇号六月二十九日附参照。

41 一八九五年五月三十一日附ブラウン女史宛てバートン博士信 (Letters to Foreign Correspondents, 370). 参照。本部はこれをもって、四月十六、十七日附のソール、ホルブルック両書簡への返信ともみなしている。

42 本便では単に Miss Abbot とのみ。本誌所載ブラウン書簡第二七〇号により、コネティカット州ミドルタウンの人と知られる。

43 神戸英和女学校第二回卒業生の一人。『神戸女学院百年史 各論』二〇七頁、また三六四、五頁に関連記事。

44 神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第二二号―明治十二年十月二十七日発行―三頁。行を改めて宮川 敏女史の消息も見える。

45 旧姓大島。一九〇〇年に井深梶之助牧師と結婚後は東京で活躍。前掲『各論』二二三頁、二三三、三頁に紹介記事。

④6 前掲『各論』二三三頁、「近代日本の女子教育と神戸女学院」第一章の三「神戸女学院の初期卒業生たち」より。

④7 アメリカに留学して生物学を学び、帰朝後神戸女学院のために盡力した。前掲『各論』二二〇頁、三三一、二頁に紹介記事。

④8 二頁に帰朝歓迎会の模様、三頁に消息。また一一頁には山脇夫人を生徒たちが三宮駅に出迎えに行ったことも報ぜられている。

④9 Miss Nina Claire Stewart (1868-1927) 米国伝道会日本派遣独身婦人宣教師。来日一八九一年。一八九六年に岡山の現場より神戸女学院に來任。『天上之友』第二篇一九一頁に略歴。

⑤0 学校のはじめに英語と歌があつたとは言うものの、長らく音楽専任教員に恵まれていない。クラークソン女史帰米直後の一八八二／三年に來援したタルカット女史の末妹マリヤ タルカット女史は音楽を担当したと伝えられるが、大方は学校外の宣教師夫人らに囑託として出講を仰いでいた。ようやく一八八五年に着任のガニソン女史は、<sup>⑤</sup>どが弱くて声楽の指導には限界があり（ソール書簡第一六二号とその註③——本誌第九号——参照）、四年つとめたのち、松山に召命を得て転出。後任のラドフォード女史は来日の船中でのケガがもとで半年たらずで帰国を余儀なくされた（ブラウン書簡第二三二号—二三五号—本誌第一〇号、第一号—参照）。その後一八九一年にケント女史の赴任を見るまでの間はオルチン師とスタンフォード夫人の救援に与っている。

⑤1 ラドフォード女史の仲介でピアノを入手したこと、音楽の授業を専一にする校舎を建てたこと、等。

⑤2 ホルブルック書簡第四一四号—一八九四年九月十七日附。

⑤3 同、第四一七号十一月二十六日附。

⑤4 同、第四一九号一九九五年二月二十八日附。

⑤5 Miss Winifred Atkinson. 米国伝道会日本伝道団神戸伝道区の重鎮 Rev. John Laidraw Atkinson の第三子。ソール書簡第一三二号、ブラウン書簡第二六六号に言及あり。

⑤6 日本における西洋音楽の始まりは宣教師の持ちこんだ讃美歌に負うところ大であつたが、日本人が古来なじんできた邦楽との違いの大きさに、教える方も教わる方も大いに困惑している節がある。進歩も遅々としたもので、早くから音楽教育の大切さを標榜してきた神戸女学院にして、生徒を専門的に鍛えるについては、並々ならぬ心配りや工夫が必要であつたことが知られる。

⑤7 前掲『各論』二六二頁、前掲論文第三章の一「婦人宣教師たちとアメリカの女子大学」より。

#### 参照文献

前掲「ブラウン書簡—訳および註(+)」及び「ソール書簡—訳および註(+)」に同じ。